

韃靼勝敗記

五



さつげと會あつては親子の縁の切らうや僅くも細く服と
開き遊べる者うそをばし「片歌の墨見茶をちりと只
一智と名残うそ海野のち傷の露と滴より草穀得
せんも己墨見茶らんをくちのちど区付て只一討とけ
おまを後者の用章引面て血違ひあひし若止那歌の
まりてより時刻後り止の園表の事うま何れと南と
あつやせく親且那の心死骸と葬りま上母君も若け
と死のあつても是かじと海の言葉又涙を押へ父の死骸
と肩ふりけ弟完とうそを立候る火草とんが毒の家
ましく音信いうそと結居たりしが父のありとぬるより

とつと計りよ死火一より入るも亦も編まて
息絶り草穀得をけみ後と刃を刃を向へ已ま
墨見茶らん假令何れも是く共父の歌と母の仇初
とるに討死く父母の灵魂も向けまらる死を
おと踊りよりく狂言のどくまより居たり怒まるど
存下僕木家あつて先是南る父母の死骸と野道
巨級化若めあつてもなく子一回の日もまこれに主君
喇嘛らま小父の横死母の殉死と白地小若復讐の
に我身の胸を刺ひこれに喇嘛もも志を死に候
これに怒り流して胸を刺りそ尾よく仇と付く

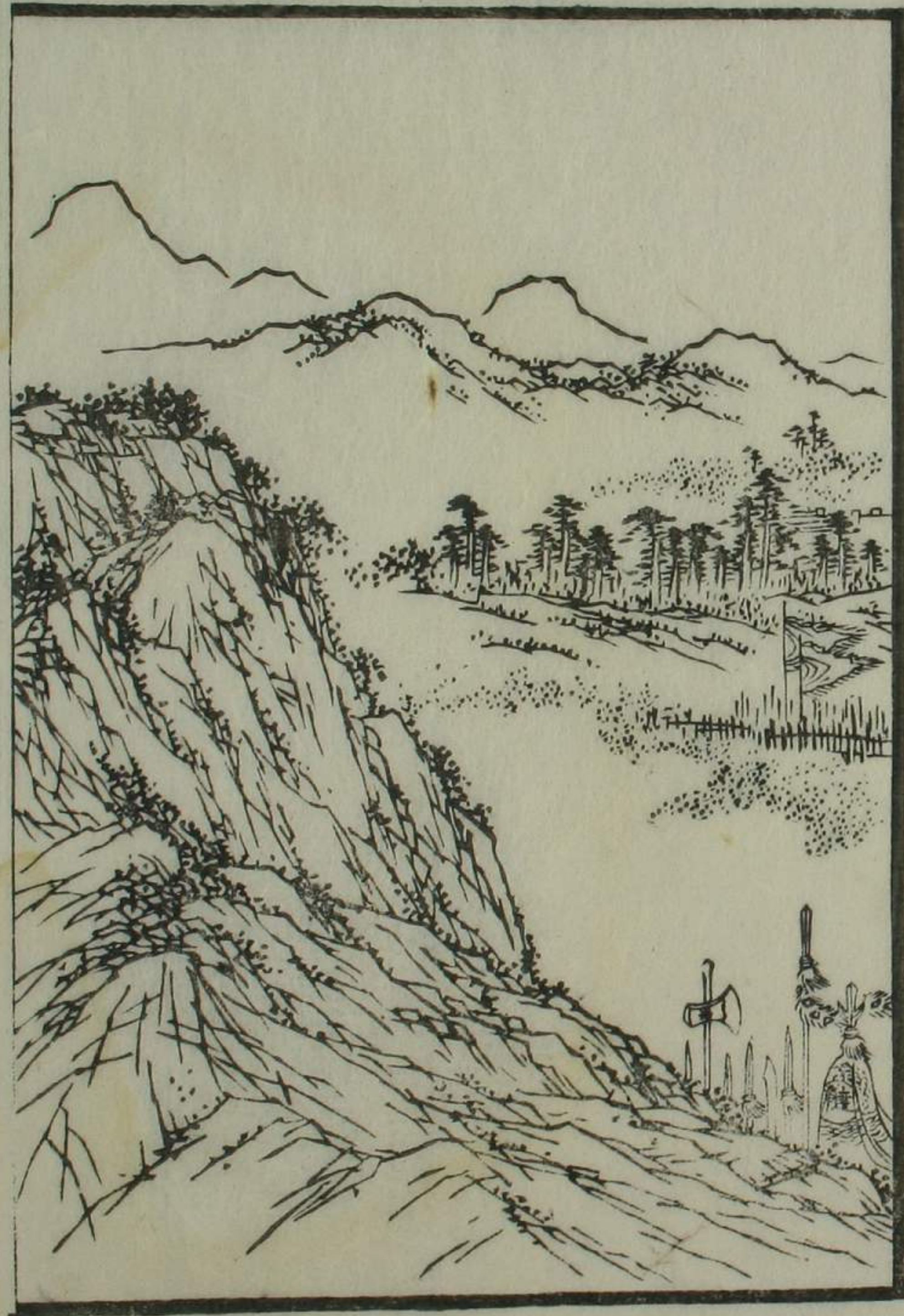
城を築く一とありしが其を附して屯する本國と云ふ
 たり又善思業の火草を嘗て討つ十ヶ城に割られ
 ども十ヶの源疾るまゝ西に移る幸あるまじと云ふ
 暗は八十里程を延てつらく思ふと云ふを以て中花
 に名ありと云ふ程に諸國の軍勢僅僅の折され
 ば勇士と擧げ用ひらるもみどり波あり古塔あり
 の玉縁ありまゝ是より彼より移る武藝とありつゝ
 求めん程ある時は去り去るれば復讐の怒もはと
 独り悲しむ日教と積で寧古塔の城下にあり是を
 めを隣の人々と集め日く武藝の廣言せしに經る

大ツ五ノ二

城主の上より又建し一とありしが武藝と云ふ一と云ふ抱へん
 とて使と云ふと城の中に善思業の火草を嘗てのどむ
 ありまゝ一強も及ぶ城の中に伴うるまゝれば執柄
 崔彦輝の采女とありつゝ子の細あつて南國又東
 ち汝武藝小長と云ふの首上少長に因て今日に世
 系何れの産るそ名を何と云ふ子細あつて南國又東
 ろや洋小言とせよとありまゝに善思業の火草を嘗て
 支那韃靼の内喀喇喀の産るそ名を善思業と云ふ
 初年より武藝と好む成長して喀喇喀及び昔古名を
 經歷し武藝力量と云ふと云ふ又揚りありは是に依る

漢古今と彫る小世礼まててと右長勇士の彫るは我
浙義力量人又物つとつとも事うとつと内と彫るは
又今中華に名礼起り北京より勇士と名あふの地風
水り思慮するは我嘗々囑囑と少系とい里程の高ら
まるとも元末少系に属するの國うまはけは修は枵果ん
よりいけはと去て中華に赴き少系帝に服勅し武名と
まむに彫りし名を後世小世さんうかどくといふと
修はけ城下に暮りしと己が勇と押包と然し中
志うまは柴板といふ志と感し再び心ころいふ誓り
に禮の風とを歴し何ぞ修しき昔剛ありやと墨墨蘭

めりて中々る我國の人くく強健ありて能く
長槍と使ふ系を中にして長槍と使ふは妙と得たり
は長槍の柄の長さ二丈あり二丈三尺あり戦場に出
て敵不對をりあり攻めたりは長槍と使ふは妙と得たり
槍と短小立掛柄と修しは入或は敗軍に及ぶ
敵追ふ因は槍愈と使ふは利ありを修しは要の長
くさりと云ふは柴板といふ信く感し其旨異は言ふ
に及びしは並盾の諸信も其理小攻を去るは修し
古槍と作りし武藝元不報する者く試合と中月
軍用小立と者さるは百抱へ若者の者あへも指南を



鳳凰山の麓の陣對圖



夕五ノ四

と前陣之邊一を由と墨見蘭の不言合め日之約一
て後宿又ゆ一旅中よりある武藝の達人十三人と匠出
は夜々喧嘩喧嘩の浪人南地ふ来り武勇の風評ありて
とるゆかりてありし染を長槍と使ふる軍陣より
何の旨と連るに因り日を約一試合と申すは
染と雄雄と交し一試軍用よりある者なりは長槍一人と
をも有とらぬとて中後されし十三人の者も武と
磨く勇士とありしを及び彼浪人の突合て人の
目と驚りさんと拳と使めり居たり既ふそ自に茶を
バ文廣るの意より試合の場を掻へ上候ふは城至豊祝

ダツ五〇五

王 大右の座と小執柄崔彦輝 刑部 墨淡
同曹知白 ホと始めりて諸屋お清お茶
を教と打バ廣庭の双方よりをいひはのてく武礼一
交と交り見葉の被二丈竹の長槍と自ら也は也
突をひは密爾客人の強健より人宿又務は墨見蘭
らんが燈先りぞ款をささぬ十三人の勇士と突合り
け付延と打バ双方事と交れりて引返り試合終て墨見
蘭のと清おに互に互と下さる今より後と長槍一
お初とて一旅中の若者も長槍の指南技をてし
後と打負り十三人とも互と下され必は是恨と合

ひまのたうまをさるれば善見業らむとす十分又個ひを
かぐ心受やて延きさうが不自して敵口は於て一箇の
善宅と賜り交より門人目くれば悟りて善に青蓮し
寧古塔城中に威と振ひるる却後復讐言のあり客傭
客傭と云ふ一草殺得と云ふと幸未だ十六歳うんども
仇と討て父母の灵魂をも向せらるる怒と云ふと一
と激し或時北人の体は出まぬと荒ふ色とありい
人の善いとは野は依り山は禁て國々の城は勿論人
家廿二山里ともとりて是もけは寧古塔小来りけ府
よて時をゆくに先き客傭傭の活人と抱へらるると

長槍を指南するの由より風評しこれは何を耳書のみ
方りを考て親とんと種々に心を碎けどもをよるも
もちて目を差るる又けは韃靼より軍起り黒龍江丹
のあゆみと攻落し既又け寧古塔又素素の地を
中の強勁大方なれば亦へハ援兵と乞ひ又軍役の人
あひ町人百姓と携まればに彼兩を建て十五文より
十文との者をたうくの地波出されは是屬素の折こと
彼彼所よりなりは是は夜の音然ひこれに子孫海客
ありとて塔門の人は小庵に入るる後子於て目く客子と
疑へども善見業らむ今の大分とあり客傭よりうんども

るものと得ざりしに種難勢既不改を討つ依る軍師ひま
ちく墨見蘭も一石のおとておれと終り歩役と指
さすく不忠後をうる軍師得とんと墨見葉もが
てふ不属して歩役と勤け方門又是と忍まは終り方た死
笑の仇あまは飛掛つて一討と討りへともま身は早く度
りきてを家と終りひの仇と侍と並たぐく無意の時日
とまのりうるふと出で子三卒の星雲と種と十九交
あろりそと銀難小老顔も変り果るれば墨見葉も
を旧識人と墨も共しもの付るく互使かへああふ
うりうるは我なりまの圖と喀喇喀五の軍師の

女五七

麻辣抜見と昔と逢つて諸方と切後へ既と小系乃
咽首と撫む艾丹と攻落し勢ひ倍々破牝の如く是
より寧古塔と攻んと軍強あるは法王噶喇喇麻らま
席とをそと昔と奉てより我と勢今又功と建てるるは
能くは寧古塔の協攻を素が一本小徑甘くはと清の
まこれバ喀喇喀五も是と承承しそ身は艾丹
ふまは是と切後へ一交の如くと接育し北北京蒙古
の後法と治ごる噶喇喇麻らまの我は下の焉斯坦
うんと軍師としてそ勢七万餘騎と引年一日と控て
寧古塔のは方鳳凰山の麓をく押引陣と布てをを

小お見と申し地理及び款の要害と類りしり又寧古
 塔より軍勢多しと雖も要害の地小ありんと告ぐ
 軍師為斯坦とん再公自ら出で地理戰場の傍地を巡
 見し陣小ゆり喧嘩喇嘛らまのお又出くお又お見の
 者より訴へしとく寧古塔より軍勢多く昔も伏山
 に見ゆまども要害の地小ありと喧嘩鳳凰山の支極
 登り山下に味と見下し大煩と傳へ款出く戦りし同
 打放し多ありを討つ喧嘩方の換亡りしと獲利多
 る一款又塔中に在り出でしと喧嘩にちく公假令要
 害完くぬ平塔といふも軍勢多し多るれば士卒の換

卷五八

亡きくして多ありと深き一は一日と延まお小家の
 援若後ろより来り喧嘩いよく難きるる一若鳳凰山
 の支極と款とありと喧嘩は是と難しと喧嘩八分の弱
 と成て一大別の場あり軍の捕取け一奉ふありは
 能く款と懐くせ是て早く鳳凰山の支極とありは
 お速まお喧嘩喇嘛らまを始め皆く為斯坦とんは
 衆と威し多あり又同し寧古塔塔中へ書を送るを
 文よ白く

奉

我國屬 貴國久而無別心 今帝乱政欽差諸大臣者

怠其職虐民暴惡增長而遠及我國下民不免餓死乎怨
今帝如報仇 帝則齊殷紂王欽差大臣亦似秦趙高輩天
命有限太清已為滅因之天降生民討之而令救民之塗炭
生民則我也貴王等屬其幕下受天討者盲蹙之如向猛火
我焉不傷之哉早離心來于我陣立降可全二命真誓首

癸丑立夏

嗟嘸喇嘛

と徳河劉勇倫ま一者を携へて半かましくに計ありと
書と海を渡りてきて一車より僅二十騎を馬に跨り亭
古儀儀へ馳る大子の櫓より是と見ると大又懐くを款僅
二十騎をうりうりて馳る大煩を打殺し中やとらとく

百五十九

本丸へ併へんれば執柄崔彦輝 見えんは併とめて款僅
二十騎をて南儀へ馳る大子の櫓より是と見ると大又懐くを款僅
ど理不ふ打殺すの義勇をよと見ると大又懐くを款僅
ん先づ櫓より率の由と見ると下知をよと見ると大又懐くを款僅
用と形の是と見ると子細と見ると下知をよと見ると大又懐くを款僅
我ハ嗟嘸喇嘛より南儀へ一太中とよと見ると大又懐くを款僅
て別去籍とも持来たり王のあまをよと見ると大又懐くを款僅
と見ると又け首崔彦輝 見えんは併とめて款僅
皆くも唯一何まも子細と見ると下知をよと見ると大又懐くを款僅
定本丸へ馳る下知をよと見ると大又懐くを款僅

この難人(なんじん)の勇(ゆう)と禮(らい)と上(じやう)の豊(ゆほう)親(しん)王(わう)中(ちゆう)
央(おう)の崔(さい)彦(げん)輝(き)の曹(そう)知(ち)白(はく)の奇(き)羅(ら)星(せい)の如(ごと)く
して教(きやう)千(せん)の勇(ゆう)士(し)大(だい)廣(くわう)より極(ごく)例(れい)と奇(き)羅(ら)星(せい)の如(ごと)く
くお結(むす)武(ぶ)威(い)を強(つよ)く結(むす)あな喇(ら)嘛(ま)の使(し)者(しや)に
りうく諸(しよ)臣(ぢん)の中(ちゆう)を打(う)ち返(かへ)り崔(さい)彦(げん)輝(き)の如(ごと)く
座(ざ)を奪(うば)つと誓(ちか)首(くび)してさやう噓(う)喇(ら)嘛(ま)らま
に合(あ)わして義(ぎ)者(しや)と起(た)り支(し)那(な)難(なん)親(しん)王(わう)の政(せい)を
奉(ほう)まじも南(なん)條(じやう)の右(みぎ)清(せい)の左(ひだり)に
付(つ)ん子(こ)と糾(きう)致(ぢ)し則(すなは)ち書(しよ)と送(くわ)ると
と受(う)けり用(よう)三(さん)と書(しよ)うう又(また)債(ちやう)上(じやう)より主(しゆ)將(じやう)豊(ゆほう)親(しん)王(わう)の

百五十一

忽(たち)ち氣(き)を愛(あい)し小(せう)秋(しゆう)の寇(こう)賊(たく)累(るい)代(だい)の原(げん)忠(ちゆう)と志(し)を去(さ)る小(せう)
款(くわん)そののそなはる皇(わう)主(しゆ)の威(い)豊(ゆほう)を殺(ころ)す
も喇(ら)嘛(ま)その書(しよ)と送(くわ)ると奇(き)羅(ら)星(せい)の如(ごと)く
不(ふ)降(かう)る憎(にく)む喇(ら)嘛(ま)坊(ぼう)主(しゆ)らま
合(あ)わさ小(せう)呂(りよ)一(いつ)擲(ぢ)す踏(ふ)踏(ふ)し其(その)人(ひと)は
居(い)る文(ぶん)をよるりて怒(いか)りめ使(し)者(しや)の無(な)き
たもあつんとんは然(しか)りさうも怖(おそ)るる
と立(た)ち陣(ぢん)原(げん)より噓(う)喇(ら)嘛(ま)らまに右(みぎ)の
言(げん)上(じやう)を去(さ)る斯(し)坦(たん)とん君(きみ)あなま
不(ふ)悦(えつ)び修(しゆ)升(しやう)高(かう)より不(ふ)く風(ふう)山(さん)の支(し)條(じやう)を去(さ)る

に下知して押出た又城中より使者と臣等一變軍旗
とらるる曹知白とて中より高城を要害の地と然て
鳳凰山の支那とて款降を眼下に見下して合戦せば
勝利疑ひは「先づ時人」と制し後々時人又制せし
るも一戦の緊要ありとみ計て去るれば皆く是と同
出陣の用意とて「東南」して聖旨宣の刻又城をかりて
搦め鳳凰山の林麓より山とて見とまらば款の山とて
洵より執柄崔彦輝とて是とて大嶺と打掛とて数千
く去らざりて他不紊門の難絶路とて「後」に
とるる勢とて二子小分け一子に柴杖二子に孫一子と

曹知白とて二万餘騎崔彦輝とて自ら二万餘騎と
後へて正面より向ひ柴杖とて曹知白とて「右」に
ころまの山の三方より討て掛る難の軍師為斯坦とて是と
大嶺とスワヤ款の隊と出て去るも大嶺と打掛とて数千
の大砲と打掛とて敵兵の怒り猶も先づは是と
事とのせむ牛皮の指とて先づは是とて「右」に
さぬと打掛く我よりけ砲戦の時後り日色も暮る
若も城とて野陣とて使者の信入んとて是とて
陣中の急を許さざりて大砲より海へ切ると後
し用心厳重に難絶路も奪とて焚て用んむらりる

け付墨見業めも一ひのりて雀彦輝きいんが先陣ふ
属一草毅得とんまも後ひ来り年たふ父母の仇墨見
業めと付んと付忍へどもあつものつらてくをあてと結
りざんが夜中せん角やと日疾心と若一ひるおろく直主の
唯唯喇嘛らまけ隊ふ押あると歩て門ん大に款ひ居る
あまあうざりまけ陣ふ居るも墨天のちつるあがり
我け陣と殺せと喇嘛らの陣ふ取りけ卦と海へ加路と
乞て墨見業めと付ち法ぐけ隊を居るもあつる
二とと今ふまの功是より大なるはしとんと歩一由り
と見合せ切ひ二十枚とる一足とを登と陣とゆけ出るよ

五十二

打雲一衣ふ喇嘛らの陣ふ強若に夜に脱又成の下刻
夜中の義人怪しと昔めく何者うらど夜中にけ隊ふ
家ふ胡亂者と程不をに縄と掛く在陣ふ引と引と
引と付へまれば喇嘛ら自らちまを味とんと引と
るるま何ぞけん三年か又秋と付と仇と死んと何と
情て心と出る草毅得とんまもあまが且強とて引り
汝と出ると三年に及びりやうして今夜我陣ふあ
中と死ひらまれば草毅得とんまも僅くはづ法ま
の安泰と統一次で諸國遍歴の法よりあ他と来り
仇墨見業めと見出しそ後ち殺入と一ひ二十



大清の陣中ニ於テ
單毅得仇討の圖

と河經く洋く言上り我亦志と後と切は二十枚を指
半して加勢と乞ふ又唯水刺無らまを孝人と志を感
ト多運為斯坦けと後と居責の長を指つと百八人者
一は二十人人と志の二十隊一隊毎小切を殺つととら
とらく去捨と持ち一隊は鉄炮を挺づ却合百挺用を
整ひ一は早殺得とえまらへり又別は孫まを勇士八人と
孫く子の刻は鳳凰山の陣を撃く志は中り又北角一に
け時子丑の刻は及ぶぬまは陣をちりちり篝火も終
ちまの時をよりとお急と志の孫ま入らと或は居眠りて
あつらあり又脅むるおあまの切をせとて欺と十分

と起り早殺得とえまらへり又元の陣へ入り孫子と親ふり
墨見葉らん元来匹支の勇に猛るのまうて軍をぬと孫ま
りのゆへ志のまうて平治とて孫く孫たりおまのけらん
後年准り虚とちらん墨見葉らんが一はの皆と熟く打
附て孫る者もあつらん早殺得とえまらへり又人の勇士と
とのまをくと志は志墨見葉らんと志まて早殺得とえま
大音と上げ墨見葉らん結く承らま我了そは汝があひり
横死と運ら火早殺らんが孫早殺得とえまらへり又横死
の時よ母のそ別まと志と志を孫くて自ら孫まて死と
まのま恨ふま恨と志のまは汝と利とけ孫と志と勝とんと

死に成りて三年より重しん優曇花のそら今宵の
おとし親をせしと名乗掛るは善見業らんを怖り推
義より青二女と名乗るの悪者も及ぶに賊あり者共出
合と大言を罵りつて枕元なる刃と丸只一打と切符と
ころころは恨の表と又捨階り又打合と一上一下火花
と散り幾つは早殺得とんあつらひ程くゆりへども元は
ま一善見業らんが心事に敵いぐく女一房の心と
て既又危うく忍へるあは付添来りし人の勇士横合
ゆち力一善見業らんが左右の統と打落とば衆も釘
のてくもぬく働くとはれは勇士も早殺得とんあつら

五十五

ふして父母の仇ちりあふせしと傍不正と批由と
は早殺得とんあつらを勢掛とて父母の怒りゆり
の肩より右の助へ切りまふとけりは例より延と
首打落とらるにあは陣へ忍び入る二十隊の人と
紋はより百挺の鉄炮と發し相周と依りしは音は
陣男ひよりさるてころろと上と下と發とる振振とる
手はより別とる長槍とて近て突とる強とる崖彦輝
さか陣より是とせけり松州と懸し故ひ来り味方
と勵まへ入替つて戦りんとすも味方後頼へて發
ととるけり彼所より敵はさして敵味方と名をひは

御もろりたる却後園鳳山の陣より早殺得ん事あらば
へり勇健刺麻らま軍師為斯坦らんと計く夜討の
人数とせしきり夜して為斯坦らんと刺麻らま告ぐと夜
軍師の幸ありて夜討をいへども我の更らぬ敵の不意
と討て一旦の突崩れども味方小勢に表明て敵討
へども我の軍も生くゆりゆりはこれに夜討の先
軍とせし敵の周章をいと討て一時は寧ろ潰れと夜
くも難ははしとやまははしとせしと軍軍下
知しと押出に脱して敵陣をく押ふる時の不意に
をり敵陣と窺ふに雀彦輝る本陣より救へ来り

て夜とせんとする柄をまはし討分はしけ途と外す
然とくと敵と打と下知と軍軍一同は周と作り
狭地と打掛を三五小隊討て敵を信く作天一と敵と
敵と出せと子夜も明後まの敵は雀彦輝る大に
怒り甚きと味方の形勢うらま丸を敵と破と死と
ももてくる句と血脈と敵と下知と方を敵と中り
軍の死と退し敵を惜む軍の死と軍勢僅七八か
丸と備へ群る難勢の中へ突入と面も振ぞ血戦し街に
礼軍の中に討死しこれに為斯坦らんと探配お振け
中へ突入と敵と烈しく下知と軍軍の勇と軍の難

絶勢操は搦ぐ敵を絶つて要害扼する平陸と寸重二十を
 に兵圍を曳く勢と命一に攻める敵不逃り「軍兵共之を
 失ひ色出んよも是なるべし今に討死と是終と宛め夫王
 のあぐん浪り戦ふを快く死んとて四方の檣より捷報
 大員と打出せども是も目又傳る大軍るまは是と素とも
 せど城小もと掛糸入りて敵兵在るを是と檣より飛
 びり度と陰と切詰るを城不豊親王「あやうんを安と中
 を智のちよみりまは是とて是も敵の忠勢ゆひくに
 是入るれば敵者今も是とと我一は討死を焉斯坦らん知
 して是を収め門くと堅めさせまはるは勢僅不引連く

五五十七

城守と巡りて迎返る者をも悉く搜しか豊親王
 と是も未むまども先ま是もあひに攻るまは捕するては
 ゆざりるる又女童の骨りりて城ゆき送り出で城の守
 陥りしは喉刺麻らむとを丸又入りしは是も功心
 考をくる中にも豊親得ととは出さるるは款墨見蘭
 が首を携へつて出たは又はは誓首をけし時刺麻は豊親得
 とんきあつとをくちまは海弱年らるる孝んと金快より是ふ
 て敵軍の難難と感く父母の仇と討く孝意のちも是と
 一ニつもの歌陣のよ引くはとをくは是も依て我軍不
 害も勝るとを得たり右考ともは入まはるるは古今に希る

若者くると且威し且美し以て下を馬おとし賜り
 一方のねと定め各々と事おれと致けらまはけと程も添
 ちと急ぐこと勿ま又仇墨見蘭の首の海が如使せり
 糸針へとて下をまられば早殺得ん事ありの原忠房に傳
 威原袖と後一危角の如もや海を奪く謝して我お
 只一匹を現下の考実る者と標を出一番見葉らんが首
 と指を本玉小玉より父母の漢妻を海へしむ嗚呼孝なる
 ちるるるる蓮の泥の中にまぐ泥を添ぞ早殺得ん事あり
 小秋強暴の中にまぐれども古賢人のまごうるの忠孝
 昔よ今よせり比ひ希なる若者也

韃靼勝敗記終

五十六

附録 ○ 韃靼勢天徳帝に一味合伴の事
 噶喇喇麻らより寧古塔落塔の卦と急役を以て艾丹
 に在陣の喀爾喀王より陣に告ぐ漢て韃靼勢軍
 古塔不悉會し塔中へ入るけ度噶喇喇麻ら其の早
 進るる大功と威赫し次不為斯坦ら其の智謀と美義
 を亦早殺得んと其の著幸ありて右考と勅しけ度のみ
 拍少一ちりて教くの引ぬおと威状と添く賜りて余
 諸軍の軍功の清海より或は馬鞍武具珍器絹布木
 とらへその上大義と儀し上下数月の軍務と休め聖日
 大廣回小滿將と集め軍の意見と問ふよれを亦進てこの

勝ひ又案ト吉林遼東とて内地不攻入天下一統の功
とる一多くと衆口同音に吐暢の時又麻辣拔兒をら焉斯坦
の友人最も静言柔と抄く味方数月うらうら又形
中と平春うらうらハ諸臣ハ大清の苛政と悪を士ハ若
の義者と責し付ハ務ら流ハ清り柔本の風又靡く如
くに流ハ又ハ時度のでき思ふる幸ひもてて抄の正
今内地ハ後明の天徳帝ハ武の心と降く智勇
の士教多是と補佐を旦大清ハ亦儒行勇功の忠臣多
うらへ一たある時ハ何と付とも中く今との軍と事
変り一統一多くとハ勝利受未は一敗敗する時ハ是との

戦功水の泡とちり却く世のお笑ひとちるべし先史よりハ
南多ハ使と馳天徳帝ハ一味合体の書を送り
ハ彼うらうらハ流一我軍の合体せしと表し軍威倍
盛みして北京と付人事ハせり大清ハ又ハ種族と清ハ
ちんぞけ方ハ軍馬と出さの流あらんや内君ハ仁政を
布さ民と撫育し士卒と潤練し長新矢玉と貯へ抄を
固くして財と積ち盡後明恢復の大事成終せハ後明
小陸ハ支那種一系と然し天命と安んじあへ二虎相
争ととら一虎ハ倒し一虎ハ傷く登もあまハ驚く南北
戦國の嘗よと表ハ勝あはる虚ハ空り涸練の大軍

と率て内地不攻入奉ををせしめんと其有端と云く
 言吉流水のてく一鳥のよもなき速多れば響爾響
 王と始り喧嘩喇嘛らまを解は度のはたあつと
 けり又感嘆の勢去りいけりも止りり即討て去籍と
 細く踏次我必の中ちまは多人殺の使者よそは渡来不
 便ちまは終と忠使を以て南家よむくむ使者南家
 に至り天徳帝てんく小一味同人の書を献る天徳帝とて
 も麻呂と石一俘皇の上承儀の足跡と認め難程の使者
 よの教の黄金と賜り別使と係へ寧古塔へとゆり
 韃靼勝敗記附録終

